

## 「玄鶴山房」(芥川龍之介)

小ぢんまりとして奥床しい門構への家、「玄鶴山房」の主人堀越玄鶴は本業は畫家だが、實はゴム印の特許を得て儲けた金で地所を賣買し多少の財を成した男だった。元氣な頃は花札や酒に溺れ、五六年前にお芳といふ女中を妾にして文太郎といふ子を拵こしらへ、省線電車の乗換へも苦にせず一週間に一二度づつは必ず妾宅に通つてゐたが、今年の冬、肺結核が重つて妾宅通ひも止め、今は屋敷の離れで臭い息を發して死の床に臥してゐた。妻のお鳥は七八年前から「腰抜け」になり、便所へも通へない體だった。家には娘のお鈴と婿の重吉夫婦、その一人息子の武夫が同居してをり、他に女中と看護婦の甲野がゐた。

或日、お芳が文太郎を連れて看護の手傳ひにやつて來る。玄鶴は瀕死の身ながら猶もお芳に未練があつて、お芳が來たと知つて「妙に切迫した」聲を發する。が、お芳が泊り込む様になると、「一家の空氣は目に見えて險惡」になつた。武雄と文太郎が喧嘩をすると、それが親達を卷込んで、お鈴とお芳とが感情的な遺取りをする。また、お芳はそれと知らずに何時の間

か「腰抜け」のお鳥の「嫉妬を煽<sup>おほ</sup>り、お鳥は無關係な重吉に何かと當り勝ちとなつて、お鈴は「それを氣の毒に思ひ、時々母の代りに詫<sup>わづ</sup>び」ざるを得なかつた。

看護婦の甲野は「冷やかにこのありふれた家庭悲劇を眺めてゐた」。彼女の「過去は暗いもの」で、「病家の主人だの病院の醫者だのとの關係上」、何度青酸加里を嚙<sup>くは</sup>まうとしたか知れず、さういふ過去はいつしか彼女の心に「他人の苦痛を享樂する病的な興味を植<sup>う</sup>ゑつけ」たのだ。それ故、一家の中で悶着が起ると、仲裁者の役を演<sup>あ</sup>じながらも心の底では冷笑を浮かべつつ、寧ろ一家の平穩が脅<sup>おそ</sup>かされる有様に愉快を覺え、重吉が「彼女に男らしい好奇心を持ち出した」のを見て、「一匹の雄<sup>オス</sup>」として蔑<sup>あ</sup>む一方、これ又愉快を覺えたりした。

やがてお芳が田舎に戻り、玄鶴は益々衰弱する。彼は「お芳の去つた後は恐しい孤獨を感じた上、長い彼の一生と向ひ合はない訣には行かなかつた」。「淺ましい」己が來し方が遣切れず、「お目出度くなつてしまひさへすれば」と冀<sup>こひねが</sup>ひ、家人の目を盗み禪<sup>ぜん</sup>で首を括<sup>くわ</sup>つて死なうとするが、武夫に見つかり挫折する。彼はたつた「一つの慰め」も自力で得られず、一週間後、病狀が悪化して絶命する。

何とも救ひの無い話だが、「玄鶴山房」を書いて半年後、芥川は自殺する。宇野浩二はこの

作品に於ける「もつとも氣味の悪い場面の一つ」として、夜間、甲野が玄鶴の枕元で夜伽よとぎをする場面を擧げてゐる。甲野は赤々と火の熾おこつた火鉢を抱へ、「薄ら寒い静かさの中にちつと玄鶴を見守つたまま、いろいろのことを考へて」ゐる。玄鶴は時々は目を醒すが、用事以外は殆ど口を利かない。宇野の云ふ様に、玄鶴の孤獨は「恐ろしいやうな孤獨」だが、甲野の孤獨も「底の知れないやうな孤獨」である。そして芥川も又、彼らと同じく、「孤獨地獄」といふ「この世の地獄」に陥つてゐた様な氣がすると宇野は云ふ。

さういふ「この世の地獄」、芥川を生涯苦しめた「人の上に落ちてくる生存苦じやくまくの寂莫」を、人はどうやつたら癒せるのか。パスカルは「パンセ」に於て云ふ、「氣を紛らす事——人間は死と不幸と無知とを癒せなかつたので、幸福になる爲それらについて考へない事にした」。だが、彼は又かうも云ふ、「人間は明らかに考へる爲に作られてをり、それが人間の全ての尊嚴、全ての價値である」。「氣を紛らす事」の一切を剝奪された玄鶴の悲慘について篤と「考へる」のも、紛れも無く、人の人たる所以を證す行爲に他ならない。(「河童・玄鶴山房」、角川文庫)